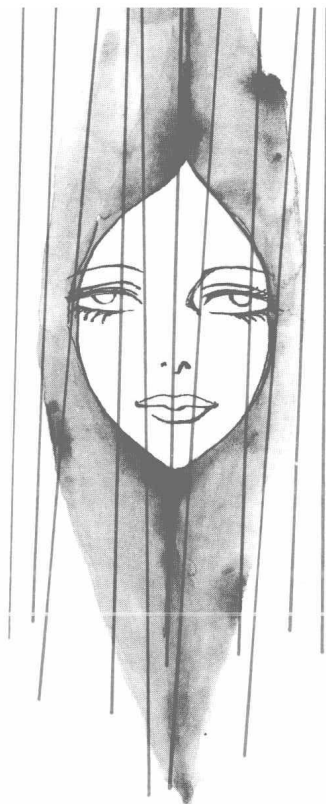


現代作家代表作シリーズ

転落の譜



講談社



現代作家代表作シリーズ

転落の譜

¥ 380

昭和44年10月20日 第1刷発行

著 者 池田みち子・梶山季之・
有馬頼義・邦光史郎・菊
村到・佐野洋・笹沢左保・
野坂昭如・三好徹・佐賀
潜・新田次郎・田中小実昌

発行者 野 間 省 一
発行所 株式会社 講 談 社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号 112
電話東京(942)1111(大代表)
振 替 東 京 3 9 3 0

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 光和製本有限会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
Printed in Japan

(分)0-3-93(製)226396(出)2253(0)

目次

女体悲願	池田みち子	五
泥棒猫	梶山季之	三
焼跡の女	有馬頼義	四
姫人形	邦光史郎	五
サーキットのあいつ	菊村到	七
広い藪	佐野洋	七
敗北の幻影	笹沢左保	一七
死児を育てる	野坂昭如	五
汚れた天使	三好徹	一七
檻の中の女	佐賀潜	一五
霧の中で灯が揺れた	新田次郎	二七
悪酔冗句	田中小実昌	三

カバ・扉画
鈴木
正

女
体
悲
願

田
み
ち
子

明治四十四年生れの静枝が始めて洋服を着たのは小学校六年のときである。九十三人の女生徒の中で、静枝が四人目であった。うす茶色の千鳥格子の縮み生地のワンピースに大きな水兵襟がついているのはいいとしても、真夏だというのに袖が手首までであった。作日までの袴に比べて、腰のまわりが急に軽くなって、なんだか裸かでいるような気がする。静枝は「洋服はいや」と急に駄々をこね始めた。深井少年に裸かをさらすような気がするのだ。男と女は別々のクラスだが、五年になったとき、上級学校を受験する者だけ集めて別クラスにした。無試験同様の裁縫学校を受ける人たちまで含めても、女は三十六人しかいなかったが男は五十四人いた。男女合同で模擬試験をすると、いつも深井が一番になった。深井はお寺の息子でなかなかの美少年でもあった。静枝は深井に憧れた。静枝が自分の容貌について真剣に考えるようになったのは、深井を好きになってからである。静枝は女ばかり三人姉妹の末娘だが、母親似

の美人の姉たちとは違って、静枝ひとりが父親に似ていた。小さい頃、姉へくっついて他所へゆくと「妹さんですか？」と不思議そうに眺められたのを憶えている。自分は美しくないから深井に好いて貰えないと思うと悲しかった。

静枝は県立女学校に合格した。深井も県立中学に入学した。卒業式の日、式が終って家へ帰る途中で、静枝はズロースが濡れて気持ち悪くなった。手洗所へ行きたくはないし、もらした憶えもない。家へ帰ると手洗所へ飛びこんだ。下着が血で真赤に汚れていた。静枝は、内臓が破れた、と驚いて、「お父さん、お父さん」と泣きながら呼んだ。母ではなく父を呼んだのは父が医者だからである。廊下下にあった姉がきた。「どうしたのよ静ちゃん」「お腹が破れたア」「大丈夫よ」と血だらけの静枝を手洗所からつれ出した。姉が二人もいるのに、生理を教えなかったのは、まだ早い、と思ったからだ。姉たちはもっとおそかった。静枝は、深井に会うこともなくなつてから、こんな目に会つて、よかつた、と思つた。こんな身体では恥しくて深井の顔は見られない。男女間の秘密についてはもう知つていた。子供はどうして生れるかも知つていた。そのことに興味をもつていたが、深井への憧れとは関係のないことであ

った。

女学校の二年の頃から静枝はにきびに悩まされた。頬にできていたのが、額にもできるようになった。色が白いので、赤いにきびが殊更眼立った。父は内科医だが、地方都市のことで、怪我人や皮膚病患者もみた。父はにきびの薬をつくってくれた。効果がないので、皮膚科専門医にかかったが、それでもなおらない。ひどくなると、顔中が赤いぶつぶつで覆われて、湿疹しっしんのように見えた。「女の子だからねえ、何とかならないのか知らね」と母は心配した。その頃から静枝は欲望を持て余し始めた。二階の今まで物置にしていた四畳半を、自分の勉強部屋に決めて、ひとりで寝るようになったのは、欲望のせいである。自然と自慰をおぼえていた。自慰はほかの人もすると知らないから、終ったあとは、いつも恥しさにふるえて、再び繰り返すまいと決心した。自分を異常者だと思った。

長姉が海軍士官と結婚したのにつづいて、次姉が若い医者者と結婚した。二人とも女学校を卒業して、稽古事けいこじに通っていた。二人揃って家を出るときの姿は静枝の眼にさえ美しく見えた。

姉妹の中では静枝がずば抜けて学校の成績がよかったから、父は静枝を女医にして後を継がすつもりでいた。

静枝は欲望を持て余していたにもかかわらず姉の結婚を羨うらやしいとは思わなかった。人形のように飾られて嫁入って、家庭の中で終る妻の生涯は味気ないものと思えた。母の生活をみていてそう思った。と云って女医になりたいくもなかった。毎日病人の相手をしながら同じことを繰返すのが、つまらないことと思える。それでも、女子医専を受験するつもりだった。医学を勉強したいのではなく親元を離れて、ひとりになりたかった。

静枝が女学校三年になったとき、母の遠縁に当る親戚から手紙がきて、息子の逸郎いつろうが×高に入学した、と報せた。寮に入るが、そちらにはほかに親戚もないことだし、お邪魔すると思うがそのときはよろしく頼む、とあった。手紙が来ただけで当人は顔を見せなかった。いつとはなしに忘れた頃になって、ひょっこり訪ねてきた。夏休みで故郷へ帰る直前であった。その頃の高校生の誰でものように、逸郎は蓬髪ほうはつに朴齒はなはの下駄をはいて、汚れた手拭いを腰にぶらさげていた。

「ロクさんの息子さんですね、眼のあたりがよう似て」

と母は喜んで、食事をするようにひきとめた。

「ほんとだね、おたくへ届けるようにと、いろんなものごとづかって来たんですが、寮で友達と食ってしまいまし

た」

食卓で逸郎が云った。母が逸郎の年齢をきくと

「ほんとね、二年浪人して、やっと入ったんで、年食ってるんですよ、今年また失敗したら、また浪人するかどうか、問題でしたよ。おふくろが喜んでね、赤飯炊いて、餅をついて、近所の人をみんな招いて入学祝いをしたんです。生れて始めて親孝行しました」

余計なことまでしゃべる男だ、と静枝は思った。それにしても折角訪ねてきた親戚の女学生が美しくないので失望しただろう、と静枝は気をまわした。静枝は相変らずにきびが出来ていたが、父の調合した内服薬が効いて、目立たなくなっていた。便秘の薬で、体内へ脂肪をためないで排出してしまうのだ。

夏休みが終ると、逸郎は駅からまっすぐ静枝の家へきた。鶏、自家製そうめん、小豆を土産にして、夕飯を食べて帰った。一週間すぎるとまた訪ねてきた。以来訪ねてくる間隔がだんだん縮った。そしてその度に夕飯を食べ、食べながらしゃべった。

ある日逸郎が来たとき、家には看護婦と車夫がいるだけであった。両親は結婚式に招かれたので帰りはおそくなる。夕飯を御馳走するのが習慣になっていたので、二人で

夕飯をすませた。

「正月休みに帰るとき、一緒にきませんか」

「そうねえ」

「僕ね、しょっちゅう飯を食べにきて、悪いと思って、もうやめようと思うんだが、夕暮になると、静枝さんの顔がみたくなる……」

うつむいて、ぼそぼそと云った。うつむくと、母親の口元にそっくりだと云われる眼元の長い睫毛が黒い影になる。静枝は身体が生温くなるような喜びをおぼえた。氷が春の陽にとけるように、堅いしこりがほぐれそうである。逸郎が好きではないが、ひとりの男が自分を好いてくれたことで、私にも魅力がある、と希望がわいた。前から母は「逸郎さんは静ちゃんを好きなんじゃないかね」と云っていたが、醜い自分が男に好かれる筈がないと思っていた。

「静枝さんが東京の学校へ行ったら淋しくなるなア」

静枝はごくんとつばを呑んで

「私、東京へは行かないかも知れない」

二年の終りから成績が下り始めた。勉強しようと思つて机の前へ坐つても、妄想がわいて、淫猥な幻影に溺れて時間を潰すだけであった。自分を醜いと思うことで絶望し、絶望することで妄想の中で生きていた。入試準備のできる

状態ではない。

「私の部屋へ行かない、アルバム見せてあげる」

逸郎を好きではないことで却って大胆になった。看護婦は中庭を距てた診察室の方にいたし、車夫の部屋は裏庭にあったが、ひょいとのぞかれるかも知れなかった。二階なら誰も来ない。

二階の勉強部屋の机の前に坐って、横に逸郎を坐らせた。二人の間でアルバムを開いて両方からのぞきこんでいるうちに前髪がふれあった。そのかすかな感触を二人は感じあった。頁をめくる逸郎の手に、静枝は頁をめくるのを手伝うふりを装ってわざと指先をふれた。逸郎は「ああ」と声を出して机の角を押しつけて身体を寄せてきて肩を抱いた。逸郎の右膝が横に投げだしていた静枝の足のふくらはぎをふんだので痛くてたまらない。逸郎を押しつけようとする

「怒ったの？ え」

静枝はやっと足をひっこめてから

「私、みんな逸郎さんにあげる、何も彼もよ」

逸郎の呼吸が乱れた。静枝は臍へそをとじて、逸郎がなすがままに畳のうえへ横たわった。息をひそめて、期待に胸をふくらませて、待った。逸郎は女を知っていた。寮の友達

と遊廓に行ったことがあるし、一人で行ったこともある。

僅か二度の経験で、女のことは何でも知っているつもりだから、静枝を乱暴に扱った。手術台にのせられた患者のように、静枝はじっとしていた。

逸郎が離れてからも静枝がまだじっとしているのので、逸郎が下ばきを着せてやった。それから抱くようにして静枝の上半身を起した。静枝が臍を開けると、逸郎は鼻のうえに丁字の黥をよせて、照れ臭さそうに笑ってから、煙草を吸いつけて

「静枝さんの姉さんたちみんな嫁入りしたから静枝さんはお嬢さん貰うの？」

「どっちでもいいんだって」

上の姉が続けて男の子を二人生んだ。いままた三人目を妊娠している。小さい方の男の子を貰って育てようかと話のでていた。

「それなら僕が静枝さんを貰おうか、いまのは約束のしるしだよ」

と明るい顔になってから「僕、帰るよ」と云った。

それきり逸郎は訪ねて来なかった。何も知らない母が「どうしたんでしょう」と云った。もう来ない方がいい、と静枝は思った。逸郎によって今まで知らなかった感触を

知った。ただそれだけのことで、快感とは違っていたし、まして結婚したいとは思わなかった。

二週間も過ぎてから、逸郎が訪ねてきた。玄関へは静枝がでた。逸郎はにっと笑って、「風邪ひいて寝ていたよ」

静枝は自分でも思いがけず、いきなり逸郎を抱きしめた気がした。性欲とは別な親愛の情である。いつものように夕飯を揃って食べながら

「僕、試験が終った日に、家へ帰るつもりです。静枝さん一緒に僕のうちへ来ませんか」

「ええ、行くわ」

汽車で二時間しかかからないし、親戚だということ、両親はなんの危懼も感じなかった。

試験がすんだ日の夕暮、二人は学割で買った切符で汽車へ乗った。

「乗越してMまで行こうよ、いいだろ」

そこは小さな温泉場だった。

「明日の同じ汽車へ乗れば、わかりやしないよ」

逸郎は汽車の中で製帽をぬいで、ボケットにしまった。

静枝は制服のうえにオーバーを着ていた。Mへ着くと、二人は両手に荷物をさげて、改札口を出た。駅前には客引きが並んでいたが、二人には声をかけない。逸郎は旅館の前

を通りながら入りそびれて、裏通りへ裏通りへと廻りながら歩いた。うす汚い旅館から老婆がでてきて、二人をじろじろ眺めていたが、そばへ寄って

「お泊りですか、どうぞ」

それで老婆の後からついて入った。畳の赤い粗末な部屋であつた。夕飯をすまずとさっきの老婆が蒲団を敷きにきた。

寢床の中で逸郎は静枝を素裸かにして、繰返して愛撫した。静枝は疲労したが、妄想の中の自慰とは違って、満足はなかった。

「赤ちゃんができたら困るわ」

「赤ちゃん！ おふくろが喜ぶよ、孫の顔をみて死にたいと口ぐせに云ってるよ」

逸郎の厚い胸に抱かれて眠ることに安らぎをおぼえた。赤裸々な姿を見せあつた者同志の安らぎであつた。

翌日の夕暮まで旅館にいた。街を歩いて知った人に見つかる困るからだ。汽車の時間になったので、旅館を出た。出るとき、帳場の方を何気なくみた静枝はびっくりしたがそのままたに出た。

「ねえ、体操の先生がいたわ、帳場に坐ってた」

「先生がいたのか、不味^{まず}かったな」

「学校で何か云われやしないかしら？」

「許嫁だと云えばいいさ」

それでそのまま逸郎の家へ行った。お寺のような家だと聞いていたが、ほんとうに大きな家であった。ひと晩泊って、お土産を沢山貰って帰ってきた。

お正月休みが終って登校すると、静枝は担任の教師に呼ばれた。職員室の担任の先生のそばに体操の先生がいた。

「春秋館に高校の学生と泊ったのはほんとうですか」

静枝は真赤になってうつむいた。恥しくて先生の次の言葉が耳に入らない。もう帰ってもいいと云われるまで、永い時間うつむいていた。家へ帰ると頭が痛いと言っていて、自分の部屋で寝床へもぐりこんだ。看護婦が検温器をもってきたので、蒲団の中で検温器を摩擦して七度八分にしてみた。うす暗くなつてから、学校の小使いが封書を届けにきた。校長から父兄への呼出状で、午後四時と時間が指定してある。

「何だろうね」

母は呼出状を持って静枝の枕元へ坐った。静枝は打ちあけられないでだまっていた。

「成績がだんだん下るから叱言云われるんだろうか」

翌朝も静枝は頭が痛いと言って起きなかった。ほんとう

に頭痛がした。

母は三時すぎに家を出たが、暗くなつてから帰ってきた。父も往診から帰っていた。

「Mの春秋館という旅館に、静枝が偽名を使って高校の学生と泊ったというんですよ、静枝が昨日泊ったことを認めたと担任の先生は云うんです。学生の名前はどんなに問いつめても云わなかった、って」

「人違いじゃないのか」

両親が揃って静枝の枕元に坐ると、静枝は声をあげて泣き始めた。母は仮借なしに問いつめた。

結果は静枝が想像もできなかったほど波紋が大きかった。退学だけではすまなかった。地方都市のことで、噂が街中に拡がると、静枝が妊娠していると云ったり、相手が三人いると云ったりした。それをわざわざ当人に報せてくれる人がいる。静枝は恥しくて門の外へ出られない。両親は逸郎を恨んだ。逸郎の方の両親は「怖い女だね、女学生が平気で旅館へ泊るなんて。翌日知らん顔で家へ来たんだから」と、静枝をおそれた。

静枝の二番目の姉は東京にいた。良人は総合病院の外科に勤めていた。街にも出ずに家の中で縮まっている静枝を両親はあわれんで東京にあずけることにした。女医になる望

みはたたれたし、退校が疵^{きず}になって、ろくな縁談もない、と考へて、せめて知人のいない都会で過ごせたいと思つた。

姉は東中野で借家住居をしていた。終日姉と顔をつきあわせて暮すのはたいくつでつまらなかつた。静枝は「洋裁を習いたい」と父に手紙で頼んだ。静枝には挫折感はなかつた。口うるさい故郷を離れられたのはよかつた。身体の中には青春の血が渦巻いている。大空を自由に飛ばたく鳥のように、仕たい放題ができたらどんなにいいだろうと想像する。洋裁を習いたいのではなく、自由に歩きたいのだ。何処かに素晴らしい幸福が待っているような気がする。

新宿の芙蓉^{ふよう}学園に入学した。芙蓉学園ではお化粧も服装も自由だし、宿題をして来なくても叱られなかつた。結婚して通つてきている人もいた。県立女学校とは比較にならない、何も彼も自由であつた。

榎^{えの}本花子は中野に下宿していたので、静枝はいつも花子と一緒に帰つた。ある日、二人でぶらぶら駅の方へ歩いてみると、二人づれのN大の学生がよりそつてきて「ねえ、コーヒー飲まない？」ときそつた。前にもこんなことがあつたが、そのときは相手にならなかつた。花子が「ねえ、どうする」と静枝の顔をみた。「どっちでも」静枝は気が

なきそうに云つた。学生たちは「いいじゃない、お茶飲むくらい」と云い、近くの喫茶店へきそつた。学生たちは女の友達ができたのが嬉しくてたまらない風で、学校の話や映画の話をした。一時間ほどいて、明日会う約束をして別れた。

翌日になると静枝は「私、今日用事があるの、誰かほかの人をきそつたら」と云つて先に帰つた。そして三越裏の喫茶店街をひとりであらうつた。

「ねえ、お茶飲まない？」

きそつたのは学生であつたが、眼の落ちくぼんだ反齒の醜男だったので、知らん顔をして行きすぎた。二度目に声をかけたのは背広を着た中年の男であつた。静枝はまた知らん顔で行きすぎた。

翌日は学校を休んで映画館へ入つた。空席があるのに、わざと後ろへ立つた。暗闇の中で手を握られた。静枝は握りかえした。顔を見ればぞつとするような男かも知れないが、暗くて顔がわからないので、骨ばつてたくましい男の手とふれあう感触だけを楽しめた。映画が終りに近づく、静枝は唐突に男の手をふり払つて、男とは反対側の出口へ急いだ。出口の近くに立つて映画が終るのを待つて、大勢の中にまじつて映画館を出た。静枝はいつでも両親を

背負っている気がしていた。退学になったことでも静枝は両親を可哀想に思った。だから、S市の宮城医院の末娘は、映画館の中で、知らない男と手を握りあって喜んでいゝ、と知られては困るのだ。

街で会った学生と喫茶店へ行き、さそわれるままにアパートで交渉を結んだことがある。静枝は出鱈目の住所氏名を云って帰ってきた。写真を写しに行つて、写真屋のソファで寝たこともある。静枝の行状は乱れ放題に乱れ始めたが、夕飯に間にあうように家へ帰つて来さえすれば、姉に疑われずにすんだ。

静枝はスーツやオーバーも縫えるようになった。欠席日数は多かったが、二年間の本科を終つて専攻科に進んでいた。両親は、静枝が洋裁で身を立てるつもりなら、洋裁店を出す資金は都合すると云つた。自分で店を経営しながら好き勝手なことをするのもひとつの人生かも知れないが、それでいいだろうか、と疑問がわいた。店の経営そのものに興味をもてなかった。次々に静枝へ近づいた男たちは、静枝の肉体に歓喜した。それなのに静枝の方は、男の歓喜を眺めているだけであつた。女体とはこういうものだろうか？ いつでもみたされたい気持なので、そのために次々に求めなければならなかった。結局、自分で自分を満足

さすしかなかった。

その頃、姉の良人のまた従弟に當る鶴橋という銀行員の青年が、本店勤務を命じられて東京にきた。実家は九州で、京都の私大の出身である。昆布の詰め合わせを手土産にして、日曜日の屋すぎ挨拶にきた。色の黒い、顎のしゃくれた、爺むさい感じの男だった。ビールをぬくと、手をふつて「僕は酒は駄目なんです。呑むと苦しいので」と真剣な顔で断つた。煙草も吸わない。一時間ほど世間話をして帰つた。それからひと月過ぎて、義兄は病院から帰ると

「今日鶴橋が病院へきたよ、静枝さんを貰いたいそうだ」

静枝は近頃美しくなつていた。切長だが細い眼や小さい鼻はお世辞にも美人とは云えないが、あんなに悩まされたにきびが拭うようになおつて、瀬戸物のような真白な皮膚に、笑うと八重歯ののぞく少し分厚な唇にこぼれるような愛敬があつた。自分で縫う洋服の趣味がいのと、すんなりとのびたスタイルがいのとでひと眼をひいた。

「無口でたいくつな人だけど、真面目そうね、私、少し好きあつてから決めるわ」

静枝は自分は不具ではないかと思うようになっていた。自慰でしか満足できないのは不感症ではなく不具だろう。

宮城医院の娘として育った静枝は、東京へ来てからは「X病院の外科のお医者さんの義妹さん」であった。いつまでもお嬢さんではいられないから、年をとれば、誰々の奥さん、と云われるよりほかに女の場所はなさそうに思える。

それにしても鶴橋は、女学校を退校になったの知らないのだろうか？ 結婚した後になってわかったら、どういうことになるだろう？ 姉夫婦はそのことをどう考えているのだろうか？

「つきあうと云うと、うちへ来て貰うのかね」

「映画でも見にゆきたいわ、少しは話もしたいから」

「鶴橋は無口だからなア、まあいいだろう」

義兄は翌日帝劇の切符を二枚買ってきた。

隣りあつた座席に坐つても、鶴橋はただ並んで坐つていただけであつた。映画が終つて外へ出てから

「私、貴方にお話したいことがありますから少し歩きません」

お濠に沿つて東京駅の方へ歩いた。

「あのね、私、女学校を卒業してないんです」

結婚してから、退学がばれやしないかとびくびくして暮すのではたまらない。初夜に良人をごまかすことぐらいは出来そうに思えた。

「どうしてです？」

とびくくりして聞いた。彼は結婚の意志を先ず両親に打明けた。また従兄の妻の実家だということで、宮城医院の血統も家柄も調べなくても大丈夫と信頼した。

「あのね、母の方の親戚が田舎にあつてね、私、正月休みに遊びに行ったの、その息子が高校に来ていたから一緒に汽車へ乗つたの、私、汽車の中で気分が悪くなつて吐気がしてね、それで降りたの、彼もつきそつて降りたわ、駅の待合室でしばらくじつとしていたけど、駄目なの、横になりたくてね、それで駅前の旅館でしばらく横になったの、貧血なのよ、気分がよくなつたから、次の汽車へ乗つたの、それだけのことよ。私は運が悪かつたの、旅館から出るとこを先生に見られたの、父が学校へ呼ばれてね、気分が悪ければ医者へ行く筈だ、つて云うの、父が怒つてね、娘を信用してくれないような学校には通わせない、つてやめさせたの」

「その親戚の学生とは何でもなかつたんですか」

「よしてよ、貴方まで疑うなんて。失礼よ」

静枝は怒つた顔になった。

「貴女は正直な人ですね、僕は花嫁の学歴にはこだわりませんよ」

結婚式も披露宴も東京で行われた。大安で日がいいので、午後八時発の東海道線の一等車はまるで新婚列車のようであった。発車を待つ間、ホームは紋服の人たちで賑った。静枝はふと、さき隣りの窓のそばに立っている紋服の一人の中に、角帽の男をみた。それが深井なのはすぐわかった。静枝ははっとして顔をそむけた。自分の結婚を深井に知られたくないのではない。その一人の中には故郷の街の人たちがまじっているだろう。高校生と旅館へ泊って退校になった女を妻に迎えるのはあの男か、と思われては鶴橋が可哀想だ。深井の眼から良人をかばいたかった。

汽車が動き出して深井たちの前を通るとき、静枝は深井の方をみた。正面から見た顔は深井とは似ても似つかぬ別の男であった。

鶴橋は童貞であった。良人をごまかす必要なぞなかった。童貞の男は妻を処女だと信じていた。

「静枝さんと旅館へ行った男のひと今日来ていた？」と鶴橋が聞いたので「あの人死んだのよ」とまた嘘をついた。

世田谷に銀行の社宅があった。六十坪の庭のある、玄関を入れて四間の赤い屋根の文化住宅である。道路の両側に同じ住宅が並んでいた。

社宅では主人同志が同僚だから、互の収入もわかりあっ

た。銀行での地位がそのまま住居にまで持ちこまれるので、互に家庭の中をのぞきこむようなるさいところがあった。着かえをして外出すれば、何処へ行くのか、何しにゆくのかと聞かれるので、話さないわけにはゆかなかった。社宅の口うるささが静枝の放縦を釘づけさす役目を果たした。

結婚した翌年に満州事変が始った。戦時色に塗られ始めると、特配のない銀行員の家庭は生活が苦しくなった。庭先を掘り返して南瓜やトマトを植えたのは太平洋戦争が始ってからである。静枝は三十をすぎたばかりで肉体的に爛熟した時季を迎えていたが、自分を不具だと思いいこんで、良人への不満はあきらめていた。

戦争が激しくなると、社宅の中からも次々に応召者がでた。鶴橋は三十を半ばすぎていたが「僕等のような丙種がつれて行かれるかも知れん」と云うようになった。子供がいる人たちは子供をつれて疎開し始めたので、主人一人が居残る家庭が増えた。庭先に防空壕を掘り、隣家との境の杉垣は取払った。

「僕は勤めがあるから仕方ないが、君は戦争が終るまで親元へ帰ったらどうかね、怪我でもしてはつまらんからね」「此処にいるわ、貴方を一人にすると田村さんのようにな